

切れる — 何が？

成瀬 武史

若者が「切れやすく」なりだしたころ、断ち切るのは気に入らない誰かと自分の繋がりだろうと思っていた。ところが最近「世間をあっと言わせて自殺するつもりだった」などと奇怪な告白を聞くようになり、彼ら同様、私も相手を取り違えていたようだ。似たような軽挙妄動を「自制心に欠ける」と呼んでいた時代には震んでいたものが見えるような気がしてきた。彼らが断ち切りたいのは自分を繋ぎ止めている心のハーネス、それが繋ぎ止めているのは他ならぬ彼ら自身の理性では？ 「切れる」とは「もう考えないことにすることではないのか？

私たちは自分の心を繋ぎ止めているハーネスを握って対人関係を生きている。そのハーネスを、逆風に抗しきれなくなると、ふと手放して自分を投げ出したくなる。ハーネスが切れやすくなるのは、材質が劣化するからか、それをつかむ握力が衰えるからか？ 血なまぐさい惨劇の主演自身の台本と彼らを知る人々の証言から見えてくる答は、カンニングをし合った試験の答案のように似通っている。ハーネスと握力の弱体化は、人間の心の本質が求める所属と是認の欲求が思い通りに満たされないことから、誰かとの心の絆が擦り切れる結果に違いない。

だれでも特定の個人や集団との繋がりが鬱陶しく思えてくることはある。欲求不満からむさ苦しい穴蔵の底で一種の自己暗示にかかり、焼き豚を食べるには豚小屋ごと丸焼きにするしかないと誇大妄想に駆られることもある。そんな憂さ晴らしの唆しに乗って自分の心を繋ぎ止めているハーネスを握る力が弛めば、どうせ明日も今日のくり返しだ、自分を評価してくれる人間も場所もチャンスもあるもんかと捨て鉢になる。視野狭窄から幻想が躍り出す瞬間である。私も20年近く前、冠状動脈の狭窄に見舞われたとき、脂汗のじむ痛みと脱力感と空気の希薄さに居ても立ってもおれない心もとなさに襲われたあげく、手術後のベッドの上で執拗な幻覚に悩まされた。大いにうろたえた経験をふり返って、英語でlose one's grip on reality (現実を把握できなくなる)とか、lose one's presence of mind (落ち着きがなくなる)とは巧く言ったものだと感じた。幻想や幻覚には(一時的とはいえ)現実を圧倒する力がある。

人情が薄れて人間関係がきしみがちな現実

をどう受け入れるか？ 社会心理学、臨床心理学、精神分析学のプロはどんな処方箋を用意しているのだろうか？ 素人の私には、自分の現状を見つめる目をちょっと先へ — 現状の彼方へ向けることに一切が懸かっているように思える。一步先には、自分を生かせる場か人がどこかに隠れているかも知れない。隠れているかも知れないものを期待する心が、何かを求める、どこかを探す、これはと思う門を叩く気にもさせるだろう。そのような可能性に賭ける心を若いうちに鍛えるのも、いつの時代にも教育に負わされる重要な役目ではないだろうか？

暗澹とした思いの向こう側にも明日はある。その明日の可能性を期待する心を繋ぎ止めるハーネスが、もし覚束ないなら、自分の外に目を向けるしかない。ひ弱な心のハーネスを繋ぎ止める盤石の岩について福音書は語る。ひと思いに切れたくなる(考えるのを止めたくなる)心を繋ぎ止めておけないのは、いまだ自分で掴んだこれといったわがが身についていないからでもあろう。「自分で身につけた技術は逃げない」とある板金工がNHKの「プロフェッショナル」という番組で語るのを聞いたことがある。動かない岩と逃げない技。それらを抛り所として人生を歩みつづけるとき、たまに堪忍袋が縮みかけても、心のハーネスを断ち切って自分の明日を投げ出すようなことはしないだろう。

(なるせ たけし 名誉所員・名誉教授)

